

一、総括と展望の主要点

同盟は、最近の階級斗争の主体的総括を媒介して、よりいっそう革命的昇揚期に対峙した総路線とそれによる階級斗争の発展を闘いよう収めなければならない。今日、国際階級斗争の最層の課題は、過渡期世界体系の歴史的転換がプロレタリア永続世界革命の好機として訪れつつあると見て、国際的に権力の対極に立つ党とその戦略戦術の形成と結合して導かれる斗争発展局面のわくどくである。転換は根底的であり、転換に要求されるプロレタリア人民の「武装」は根底的であり、それは、既存の人民の世界観とその預想的形態・諸ヘゲモニーの動搖・分解・変質を、プロレタリア人民をしてのりこえることを要求するのであるから、革命的理論が文字通り、かゝるのりこえを必然化する形態において提出されなければならない。それこそ、党とその戦略戦術である。左か、それが革命的表象の自己展開として与えられことなく、斗争のべき未来から規定した階級斗争と党活動の實踐的総括を不可分の契機とする。

かつ、それ総路線でなければならぬのは、今日プロレタリア人民の直面する全日帯的斗争とその昇進において諸斗争局面の連鎖として初れる革命への総過程を、上からの党とその戦略戦術による闘いとして主導してゆくために、次の諸側面を不可分の諸構成要因とするからである。

① 第一は、世界戦略と世界党のための闘いである。過渡期世界とそこにおける帝国主義の不均等発展の現段階かとする特殊な形態が、革命的昇揚の根源と形態を客体的に規定する。革命の實現は攻撃的階級斗争の戦略によるのであり、それは「帝国主義の侵略・反革命と対し、国際的階級危機を世界革命に転換せよ」と示される。この七回大会の基本的な戦略視点は、世界階級斗争の発展のなかで、それに対峙して、どのような共産主義的急進性―昇揚に対峙するプロレタリア的ヘゲモニーを提出しえたか。その具体的現象的検証が総括の核心であり、発展的環を理論的に規定することや戦略の核心である。そして「ミニニスト・インター不在のなかで、かゝる普遍的世界革命戦略視座の提起と戦略的深化が、またにかゝる戦略的前進と結合しつべき独・仏・米等の革命的ヘゲモニーの強化をもった世界党のための斗争の局面をきりひらいてきているのか明らかにならなければならない。

② 第二は、二の日本における具体化としての政治

方針の案検と新たな相契である。各回の下、とりわけ、帝国主義日本におけるプロレタリア独裁のための主要戦術を、わが同盟は、日帝打倒の展望をもつ左日帝総路線対峙斗争として定式化し、闘って来た。その具体的表現は、沖繩―AUSA―PAC斗争であった。二の具体的な表現は、沖繩―AUSA―PAC斗争であった。二の具体的な表現は、沖繩―AUSA―PAC斗争であった。二の具体的な表現は、沖繩―AUSA―PAC斗争であった。

③ 第三は統一戦線に関する総括と展望である。党的戦略戦術は階級斗争の発展局面を通して現実化され、革命のよきに、権力を奪取する。みならず人民を「引きあげていく」ために、その現実の物質化過程は、「大衆路線」となる。左か、大衆一般への到達は、党独自の直接的な大衆への接近ととち、とりわけ、諸斗争団体、機関における、またそのための党派関係、統一戦線、党派解体を媒介としてこそ可能である。

七回大会は、世界―帝国主義的、反帝統一戦線、を提起した。東欧過程は、反帝統一戦線とプロレタリア統一戦線の連関を、諸戦線にわたって提出した。基本的には正当なこの提起が、諸局面で勝利的に貫徹しえなかったことの原因を(1)統一戦線を規定する路線の過渡的な部分的な一面性、(2)統一戦線政策自体の未成熟性、(3)組織的指導の混乱としてとらえる。そして、統一戦線戦術が、党派的力学のアラマツァンフな対応に消去されるべきことなく、基本的にプロレタリア党建設のための全東欧から結合した党派解体―大衆の誘まれる革命派、改良派からの解放という任務と、直接約現在において大衆集約に部分的に部分であり、このから権力奪取に大衆を高める行程における大衆の斗争、組織形態として、権力に對峙する。そして、それは、世界―帝国主義のものとして、反帝統一戦線のプロレタリア統一戦線への転換、組織表現へそれは、世界革命戦争への転換とそれきりな世界―帝国主義の革命的階級斗争の具体として高めなければならない。さらに、東欧的ポイントとして、七〇年にむけてどう体现されるかというか、とくに目標の具体化に際して、現実に登場せしめることである。

④ われわれの戦略戦術は世界が一回のプロレタリア共産主義単一党を前提し、並行して闘いとする

のとして過渡的に提出された。世界・一四における同時的革命的進歩が、同時的革命的発展の過程であることを確認し、かゝる任務に主体的に対処せんとするものであった。党のための斗いは、世界党にむけてどのような実質的、組織的段階を画しつゝあるか、ととちに①「ア口独のための蜂起を斗いとる党の質はどのような前進せしめられたか、②「ア口レタリア党としての実体はどのようなうちかためつゝあるか、③「そして、理である、中央集権的指導中核の所在はいかに点検されるべきか、である。ここにありてわれわれは、同盟がより可能にかゝる必須の諸案に思いつゝも、党の一体性をおお、党的発展の端緒段階に特有な不均質性の持続を克服していないことを明らかにし、目的意識的指導と基準となすべき理論の組織化とは、かゝる不均質性の意識的な克服を組織指導の不可欠の型としつゝ、実践的に新たに高次の統一斗争に移行せしめるべきことを確認する。党的斗争の統括は、集中して、世界的拡張の側面において、地区・細胞一大衆への深化の行程において、われわれが規定した（現時態にあっては、特殊に世界党―日本党を併せまつて）統合参謀本部たるべき指導中核に關して、階級斗争の発展が要求する全斗争契機を包括せしむべき主体的点検と再構築となさねばならぬ。

⑤ 二水らの諸案にわたって、従体としての同盟活動は、一貫性をもち、導く同盟体制の問題を、戦略にもとづく反帝統一戦線形成とそこで永続的なヘゲモニー樹立を七〇年斗争過程で荷いせると二水らの發意的強化の問題として、現状の点検をふまえて、計画―実現をおしすゝめることである。

二水ら従体の向題に對して、以下の二とく克服、発展の方向を統括し、総路線の構築と展開にかゝらねばならぬ。

二、世界戦略と世界党

過渡期世界における帝国主義の不均等発展―市場再分割の展開が、従体として帝国主義の侵略・反革命を強化し、三アロツクの革命斗争の同時性、同質性を客観的に必然化してきた。ここに、主体的な対応は、まさに世界革命の同時的、戦略的明確化をなすべからぬ。この世界同時革命の発露性は、すでに、ベトナムに突出した斗争が、帝国主義各四の自国政府との非和解の斗争、反革命同盟NATOの、守保との対決への推転という67-68年の新たな局面の理論的把握によつて、著せられる。ここで、世界革命戦略の現実と導かれてこられたといふ意味において、自然発生的な、とくに米・露・仏の革命斗

争が、帝国主義の侵略・反革命との対決に基軸路線を設定すること本明らかとされる。そして、侵略・反革命との対決―四階級の階級危機―世界革命の同時性、攻撃性は、侵略・反革命の歴史制約性をもつ、四階級内の形態・相違に規定される。すなわち米帝一元体制が別、帝国主義一元体制にとつてかわることかできず、また「帝国主義戦争」にストレート「解決」形態を見出ししめぬことが、三アロツクを席卷する侵略、反革命同盟の強化を米帝のベトナム侵略と並行してNATO・安福の改編・強化問題として提出することである。かつこれは、とりわけ再分割を迫る地位にある日帝・独帝が、相矛盾し対極にたつ四民結集の選択を迫られるものとしてあることである。すなわち、このことから、世界―四同時革命は、帝国主義の侵略反革命対決―反革命同盟崩壊―自国帝国主義の打倒、の相違において与えられ

る。こうして戦略論の核心は、同時性と攻撃性を体现する要として、反革命同盟崩壊と、自国帝国主義打倒の連関として発展せしめられるべきことである。

問題は、こうした戦略論の発展的提案を可能とする四階級―日本階級斗争の革命主体の高度化を統括することである。それは、①ベトナム革命戦争が突出する過程でそれと結合したベトナム反戦斗争が、米帝四民統合の亀裂を突破口として、反革命同盟との対決―自国政府に對する非和解の運動、主体をかくとくしてきたことである。②日本において、革命的左翼の組織された暴力が、自国帝国主義との対決に進行する過程が、同時に、まさしくそれに導かれた広範な大衆の山ぶりの戦斗化が、自国帝国主義打倒の過渡形態として、直接に反革命同盟（とその強化）の主体に對する斗争として激発してきたことである。この併行手続でなく、結合と一貫した前者への統合のなかに当面する実践が、決定的な戦略問題があるからである。③そして、フロントとして、かゝる根拠に至る主体的統括を、七大会の勝利とその部分的限界の統括―局面毎の検証として提出することである。

戦略論深化の現段階は、二中等討論の統括（ア口通ル）に至り、七回大会から、③四階級反戦集會主張論文へと具体化されてくる。

七回大会は、現代を世界的規模での資本主義から社会主義への移行が、労働者四家の成立という、より高度なアロレタリア解放斗争の発展と四階級の結合条件の深化をもち、資本主義の最後の段階としての帝国主義が過渡期世界として現出することを明らかにした。だがそれが（諸労働者四家の墮落を帝国

主義がかくとくしたとはいえず、体制固守論一超帝国主義論の再版としての諸修正主義的傾向の理論的根源に対し、帝国主義論を基準としてとらえるべきことを貫徹した。過渡期世界の特殊な発展段階として、戦後の米帝一元体制の歴史性と、それ不均等発展の鉄の法則の貫徹一帝国主義相互の史上三度目の市場再分割による新たな国際秩序再編の局面の到来を確信し、世界階級斗争の同時的昇場の根源がここにあること、だが、尚幼者口家群の成立に代表されるより高度な国際階級斗争の時代とは、この高度性への帝国主義の対応を不可避とし、帝国主義対立の貫徹形式に新たな要因となるのみならず、逆に国内諸閣をも規定していくこと、高度な自然発生性としての反・反革命の広がり、世界的な階級斗争の攻撃的条件を形成していることを明らした。このことと戦略的方向性を攻撃的世界同時革命の血づのスローガンと、一戦略スローガンに定式化した。侵略・反革命の強化が、とくに帝国主義心臓の階級斗争によつて世界革命へとけん引すべき時代に、われわれの戦略的結合の第一歩として画定したことを確認せねばならない。

この方向性は、しかし、同時性と攻撃性も世界革命戦争という形態において三マロツク階級斗争とその結合の具体的展望に、8・3集会への主張として展開せしめられた。それは、二中全会の総括として提出された、侵略・反革命の複双形態が、西独、日帝の再分割要求を主導軸として展開されることの把握を媒介として、更に、現時様の帝国主義体系の死活をかけた侵略・反革命水、とりわけ日本、西独の国内反革命、絶対形態の暴力性への転化を不可分として進行する階級決戦の局面への接近が「帝国主義戦争を内乱へ」ではなく、侵略・反革命による帝国主義対立、「体制固守」・植民地抑圧を、それへの攻撃的対決によつて三マロツク結合した世界階級対立を革命戦争への徹底化することを明らしたことをのぞくのである。

これらを含まえて、われわれは、侵略・反革命の複双形態とは、諸帝国主義にとつて反革命同盟の再編強化を通して自己の延命と地位強化を追求する道であり、自国帝国主義打倒と反革命同盟との連関が、戦略論の具体的核心であり、かつ、世界一四同時革命、その攻撃性の具体的発現の核心であることを明らかにする必要がある。(さきわめて実践的性格をおびて、この問題は、4-7月政治過程に回られた。この点の未整理が、総路線対決斗争の絶対的な正当性にもかゝらず一四的反帝イスマムへの傾斜と小ブル的战斗性の昇場への包括力の減速とを、したがって逆に総路線対決斗争への全同盟的結束の都

われわれは、帝国主義の侵略、反革命の強化、帝国主義の危機をその世界一四階級的に革命的危機に転化する要として攻撃的に対決する。だが侵略・反革命の強化は国内反革命を随伴して進行するがゆえに、その斗いの質は自国帝国主義打倒でなければならぬ。それは総路線対決斗争によつて荷われる。そして、諸帝国主義が、自らの延命の総路線反革命同盟の強化として体现するが故に、反革命同盟崩壊は自国帝国主義打倒の不可欠の一環であり、かつ、世界一四同時性の結合環であり、帝国主義の危機の外在化を世界階級斗争一世界革命戦争に転化する攻撃性の環である。四中全会においてより求めるべき戦略的昇場はここにある。

そして、かかる戦略的深化の実践的意は次の実にあるだろう。

a. 諸国、とくに帝国主義心臓部の階級斗争が、ベトナム反戦一反革命同盟反対に転化し、革命的昇場を迎え、米・独・仏に代表的なように、一時的後退に結果している現状は、主体的に、帝国主義の侵略・反革命、再編・強化とそれがかたたらす国内結合の再編との、結合された斗争の国際的展望をよつて自国の斗争の戦略的前進がありうるということである。

b. そして、かかる領域で鋭く回われている党形成を媒介した斗争の発展のために、その基準となるべき世界党を用意することにある。

c. 日本はじめ諸国のNATO・安保斗争の昇場に対し、その世界戦略的地位と展望から規定した斗争戦略を提出するるのであり

d. 窮極的には世界革命戦争を闘いぬく国際統一戦線とその一環としての反帝統一戦線を自国帝国主義打倒・反革命同盟崩壊の共通の政綱のもとにかくとくし、総路線対決斗争の包括化のために決定的である。

世界党のための斗争

党のための斗争が、大会以降よりひろいた局面は、まさに戦略的前進を駆使し創出する党的主体の昇場として総括・展望がなされねばならない。基本問題の第一は、世界党一新コミンニスト・インターの提起の正否とその条件の前進如何である。三マロツク階級斗争の等質の戦略的結合が要請され、戦略的結合を求めると斗争の先端に可能な革新は究行立っていること云々がその起原と、その各目的党への構成とその構成自体の在り方一四同時性、同質性、したがってインターへの指定は、とりわけ最近の独仏米の斗いの昇場と一時的後退によつて鋭く実践的に検証されたこと云々は、われわれの最近の、普遍的な世界戦略的意と特殊な日本の革命斗争のマルクス・レーニン主義的具体化が、世界革命

④そのことは、党取關係が新たな戦略的位置をもつてくること、すなわち、社共と分りした諸党派とその運動を総体として、反帝オニ潮流の独立した地歩を、とくに10、8斗争以降形成することによって、これを権力奪取にむかう統一戦線への展望をもつて、当面の環である70年安保を斗いぬく、共産の課題・斗争の方向・斗争組織形態における党取間の統一戦線を反帝統一戦線の要として要非される強化と、その中の諸党派の戦略的分化の進行が党派的大衆運動へ体の強化と結合してあるとき、存する形態をすみやかに高次の統一の方向はありえない。こゝを我々のヘゲモニーとは、戦勝を基準として統一戦線共運政細一協定を實現し、統一戦線による大衆的實踐の階級を媒介して他党派の地位をしのいでいく総体としての同盟組織の力量である。

④かゝる観点にたつて、フロレタリヤ権力奪取のため統一戦線を、現時から反帝統一戦線の結成、質量的発展として提起する。

反帝統一戦線は、70年安保斗争への経過程において、日帝打倒・安保粉砕の具体的斗争共同綱領領を、革命的左翼諸派の統一戦線結束案として相互確認することをもって相成する党派間統一戦線である。この統一戦線総体のヘゲモニーによって、全学連・反戦の革命的再編・結合をひたつとる方向をめぐらぬはならない。そして山川・成田を始めとする戦斗的諸大衆斗争組織との恒常的な同盟關係を強化、拡大する。社共との諸々の斗争機關を媒介した共闘に關して、この統一戦線として、かつ独自の党派として、革命的に介入する権利を一般的に留保する。

この日帝打倒・安保粉砕の党派間統一戦線の具体的な實現の端緒を階級斗争の緊急の要請としてつゝも継承された党派關係を考慮し、一月前斗争の結束した統一戦線による協定と共同實踐をもつて階級斗争とらぬはならない。それは、一月斗争を労働者のストライキを含む「組織された暴力」の圧倒的な拡大による安保粉砕の戦線の社共からのヘゲモニー奪還と、その斗争の激発が密着した権力の反革命をついで六月前米・ASPRAC以降の持続した昇揚を斗いとリ、かつ、それと結合したのが同盟の党建設の要である。かゝる方向をめざして、9、11月斗争において、統一行動の再編・強化をめぐらぬはならない。

